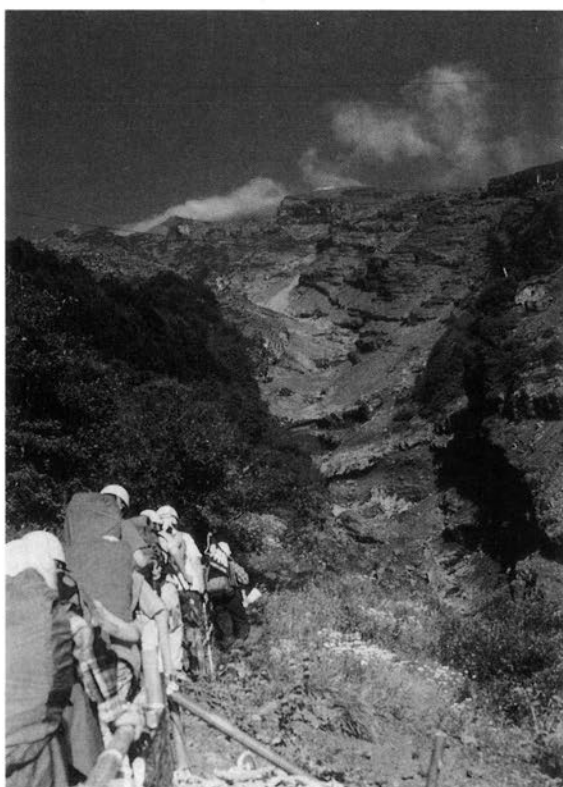




大沢崩れの現場を行く (9月11日)

富士山とエヴェレストと中高年 —二〇〇〇年の山を考える—

江本嘉伸



1999 年 (平成 11 年)
10 月号 (No. 653)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円

目 次

富士山とエヴェレストと中高年… 1	ブルイユにて…………… 4
さんけんだより…………… 6	報告
集会委・運営方法を変更…………… 7	図書委・旧天城峠…………… 7
フォトビデオ・写真展開催…………… 8	三水会・あんころ餅と薬湯の集い…………… 8
ラリグラス植林報告…………… 8	日本山岳写真の系譜展…………… 9
海外登山基金助成登山計画募集…………… 9	アルパタ峰初登頂75周年記念
イベント開催のご案内…………… 10	支部だより・秋田支部…………… 11
東西南北	なぜ、『(新) 日本山岳志』? …… 12
カイルス巡礼とチョモランマBC	への旅…………… 12
北海道のエゾウスユキソウ…………… 13	図書受入報告…………… 14
ルーム日誌・会員異動…………… 14	INFORMATION …… 15
▶ 日本山岳会事務取扱時間	
月・火・木…………… 10~20時	
水・金…………… 13~20時	
第2、第4土曜日…………… 閉室	
第1、第3、第5土曜日…………… 10~18時	
▶ 図書室開室時間	
日曜・祭日・月曜を除く毎日…………… 13~20時	

一九九九年十月。あと百日足らずで「二〇〇〇年」になる。数字上のことではあるけれど、新しいミレニアムになる瞬間に存在していることの偶然は楽しんでもいいのではないか。次は「三〇〇〇年」までないことなのだから。

その西暦三〇〇〇年にいあわせるであろう日本人たちは、千年前、つまり現在の私たちをどのように「回顧」するだろうか。そんな発想をもつて、自分たちの時代を見てみたい。

■千年前から登られていた富士山

たとえば、登山である。

いまから千年前といえば、『源氏物語』や『枕草子』が書かれた頃だ。あまりにも遠い日々のことでピンとこないが、多分人々は私たちと同じように、あるいはより切実に自然や物事について考え、時には挑戦して

いたのではないか、と思う。山登りもそのひとつだ。

山部赤人に代表されるように、万葉の詩人たちが憧憬をもつてうたいあげた富士山。三七七六メートルのその山頂への登山は、千年前にはすでに行われていたらしい。

山崎安治の労作『日本登山史』によれば、富士山について詳しく書かれた最初の文献は、平安時代の漢詩人、京都の都良香（みやこのよし）か、八三四（八七九）による『富士山記』である。この中で作者は、富士山の頂上中央がくぼんでおり、その中にうずくまるようにして虎のような石がある、という記述をしている。ご存知のように富士山頂のお鉢の底には「虎岩」と呼ばれる大きな岩があり、この記述は山頂に立って見なければわからないはずである。良香本人は登らなかつただろうが、登つ

人から聞かなければ書けないことだろう。

富士山は良香が存命中の貞観六年(八六四)に、有史以来最大の噴火をしている。真紅の火柱が燃えあがり、溶岩流によって山麓の原始林はすべて焼け、河口湖は熱湯になったという。美しい富士山が示した底知れぬ破壊力を目の前にし、神道を奉じ、仏教を受容して間もない日本人たちが畏怖の念を抱いたことは容易に想像できる。

その感情の中から山頂まで登拝する心が生まれたのであろう。富士の祭神が木花開耶姫(このはなさくやひめ)と命名されたのは、ずっとのち、十七世紀になってからのことだ。

九月なかば、その富士山の御中道(おちゅうどう)をはじめ一周し、この霊峰の現在の問題のひとつ、大沢崩れの現場を見る機会があった。

大沢崩れは、三七七メートルの山頂の剣ヶ峰付近から西に向かって標高二二〇メートル付近まで幅五〇メートル、長さ二・一キロに及ぶ谷の崩壊地形をさす。現場で砂防工事に取り組んでいる建設省が、富士山の御中道を一時的に「開放」した際、百数十人の応募登山者たちに同行させてもらったのだ。

現場に立って、崩壊のすさまじさにあらためて息をのみ、大自然の威

力と、先端技術で「崩れ」に立ち向かう人間の小さな抵抗ぶりを、山頂から転げ落ちる石を永遠に運び上げる、シジフォスの神話になぞらえつつ考えた。

御中道は、富士山の中腹、標高二三〇〇～二八〇〇メートルをぐるり一周する道のことだ。富士山を信仰する富士講信者たちが修行のためにたどった山道で、富士講が活発になった江戸時代にはいつてから歩かれるようになったらしい。

周囲二・一キロのこの道は、大沢の崩壊で閉ざされた。とくに一九七七年五月、七十九歳の単独行の登山者が大沢崩れで転落死する事故が起きて以後は、事実上閉鎖状態となった。ちなみに、この人は、日本山岳会永年会員の中原万次郎である。

高齢の身で大沢崩れの危険な場所へなぜひとりで行ったのか、当時の捜索隊報告には「捜索完了直後、地軸をゆるがす雷鳴のような響きと共に、はるか上方より砂塵を巻き上げて落ちてくる石滝(落石群)が瞬時の内に今(注:遺体)が引上げられたばかりの滝つぼに流れ落ちていった。その土砂の量はダンブカー千台ははるかに上まわる量であった」と、崩壊の恐ろしさが記録されている。日大山岳部にはいまも遺族から寄せられた、その志を継ぐ「中原基金」

が残っているという。

大沢崩れはやわらかなスコリア(火山砕屑物)層が流出してしまいうために起こる固い溶岩層の崩壊現象で、下流の扇状地に堆積している木片の年代測定から、ほぼ千年前に崩壊は始まった、と推定されている。それでも登山する人たちが絶えなかったのは、高みに惹かれる人間の宿命なのだろうか。

■エヴェレストと中年登山

富士山と違って世界最高峰のエヴェレストには、十九世紀まで登頂の記録はなかった。富士山が人々の住む地域に接して聳えているのに比べ、こちらは人里を離れた神々の世界に位置しているためだろう。

一九七〇年代から八〇年代にかけて、南のネパール側と北のチベット側の双方からこの山の懐にはいったことがあるが、その時八八四メートルの頂を見上げながら頭をかすめたのは、二十世紀とは、人間がこの山に登ろう、と本気で考えた時代だったんだ、ということだった。

何度かこの会報でも取り上げたジョージ・リー・マロリーは、そのシンボリックな存在として知られる。近着の米「Climbing」誌(九月十五日号)は、七十五年ぶりのそのマロリーの遺体発見と、一九九六年五

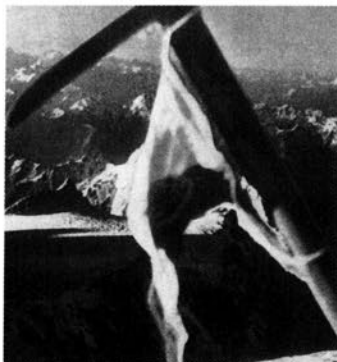
月に起きた難波康子さんはじめ国際公募隊の悲劇の「その後」を柱に、あらためて「エヴェレスト登山」を特集している。

マロリーは、人類ではじめて世界最高峰へのルートを切り開いた登山家であり、彼の死後半世紀以上を経て登場した国際公募隊は、まったく新しいビジネスとしてのガイド登山をヒマラヤに持ち込んだ、マロリーの時代には考えられなかった登山のかたちである。

公募隊の出現は、登山経験が少なくとも条件さえよければ最高峰に立てる可能性をもたらし、他方、九六年の遭難は、そういう試みの危うさを証明した。

一九七八年にはじめて無酸素登頂をなしとげたラインホルト・メスナーは、この「Climbing」誌の中で、一九二二年、アムンゼン隊に遅れて南極点到達後全滅したロバート・スコットが凍える指で自分たちの失敗について書き残した日記が、翌年になって三人の遺体とともに見つかった事実をひきあいに、九六年春の公募隊のリーダーのひとりだったロブ・ホールがニュージーランドにいる妊娠した妻と衛星電話を介して最後の会話を交わした、その時代性に言及している。

「エヴェレストの直下、マイナス四

1922年最初のエヴェレスト行のマロリー
(左から2番目)1953年7月3日、ヘルマン・ブールは頂上に
ビッケルを残した(「八千米の上と下」から)

○度の中、死んだふたりの仲間のごくわきで話されたこのニュージランド人の最後の言葉は、翌朝には全世界の新聞に伝えられ、人々が温かいパンとコーヒーをとりながらその悲劇を読む間にロブ・ホールはゆっくり死んでいったのだ……」

メスナーのやりきれない批判にも関わらず、エヴェレストを含むヒマラヤのポピュラー・ルートで、間違はなく今後もこのスタイルの登山は増えてゆきそうだ。九六年の悲劇のクライアントがそうであったように、そのブームを支えるのは、経済力と

余暇に恵まれた中高年世代だ。

ヒマラヤまで行かずともいまや山々は、中高年の世界である。今回久々の御中道めぐりに公募で参加した百余人の登山者のうち二十代はわずかに二、三人、圧倒的に「中高年」世代、それも五十歳以上の男女が目立った。二十世紀末の登山界の特筆的傾向、中高年登山者の急増ぶりがある。ここでも、現れていた。

一九七九年、「うさぎ小屋に住む働き過ぎ人間」(欧州共同体委員会対日戦略基本文書)と揶揄された日本のサラリーマン、労働者が、余暇のすそめ、脱会社人間、などの心地よい言葉に戸惑ううち、気がついてみると経済の失速で五十歳を過ぎると閑職にまわされ、六十歳になったら一斉に余暇の時間に突入するようになった。

山頂まで登る行為がもたらすもの、それは大いなる自然に浸れる喜びと、「やり遂げた」という充実感だ。静かな山の道をマイペースで行動でき、さらに十分達成感を得られる登山という行為に、組織のわずらわしさや疲れ、年金がもらえるようになった元氣な中高年者が殺到するのは自然なことだ。

とくに男たちには、そういう一種の日本型仕事人間的信仰登山の雰囲気がある、と思う。

人生の星霜を経て自然に浸る機会を得たことは素晴らしいし、そういう人間が増えることは長い目でみれば若い世代にいい刺激となるだろう。しかし、長い期間の労働への対価とはいえず、「金と時間」に恵まれた熟年世代が一斉に山に向かう姿に、拒否反応を抱く青年、あるいは中年たちもいる。初心者の登山教室はともかく、どんな登山でもオリジナリティーを持てるかどうか、問われるのではない。

一方で、そう遠からず、揺り返しがあるかもしれない、とも思う。現在進行している「少子化」の傾向で年金システムが揺らぎ、労働力維持のために「六十五歳定年制」が実現すれば、やがて中高年の半数は、仕事に戻らざるを得ないからだ。せっかくの中高年登山、いい形で持続してほしいが。

■ヘルマン・ブールのビッケル？

マロリーとは別の、もうひとつの発見の話。真偽はまだ確定されていないが、ヘルマン・ブールのおぼしきビッケルが、近藤和美を隊長とする登山隊によってナンガ・パルバットの頂上直下で発見されたという。七月末のことだ。

エヴェレスト初登頂から一カ月後の一九五三年七月三日、ナンガ・パ

ルバットにオーストリアの登山家、当時二十九歳のヘルマン・ブールが単独登頂した。チロルの小旗をビッケルに結んでブールは写真を撮り、記念に山頂に残して下山した。ブールの著書「八千米の上と下」には、その時のことが感動的に書かれている。

今回、登山隊の池田壮彦(五二)は、頂上直下のガレ場で一本のビッケルを見つけた。池田は古いビッケルに関心があり、銘からして、時代的にブールのものではないか、という。

そうだとしたら、なぜ過去の登山隊は見つけられなかったのか。保存のよさからみて、多分長い間雪に埋もれていたのではないかと、池田は推測する。五月のマロリーの発見の際にもいわれたように、地球温暖化の影響がここにも現れたのだろうか。昨年のチョモランマを含め自分で登るだけでなく仲間をリードして登らせる近藤和美は、すでに五十七歳。ナンガ・パルバットを無酸素で登った最高齢登頂者になる。日本にも大した中高年が現れたものだ、と感服する。

富士山とエヴェレストと中高年。三題めくが、二〇〇〇年代も登山界を象徴するテーマであり続けるだろう。(文中敬称略)

ブルーユにて

織内信彦

三年続けてイタリアのブルーユへ行ってきた。今年の七月などはそこで暮らしてきたといったほうがよいくらいだ。そういうと、ブルーユってどこですか、とよく聞かれる。若い人ならともかく、かなり年配の会員からそう聞かれると、私はちょっと困ってしまうのだ。

そこで、ブルーユはアオスタの支谷、ヴァルツールナンシユ村の最奥の集落で、スイスのツェルマットからテオデュール峠を越してイタリアの谷へ降りてくると、いやでもこの集落へ出ると説明すると、ああわかった、チェルビニアのことか、といわれる。

マッターホルンの初期の登攀、チンダル、ウインパー、カレルなどが根城にしていた山村の集落であり、カレルにとっては生まれ故郷ツェルナンシユ村の放牧地帯、チーズをつくる作業小屋などがあつたところである。マッターホルンのイタリア名モンテ・チェルビノをとって、近年チェルビニアとも呼ぶようになった。集落の入り口からはずれまで、毎

日のように歩いてしたが、軒なみのBARや土産物屋の店番とたちまち顔なじみになってしまふような小さい集落で、端から端まで歩いて十分とかからない。標高が二〇〇メートル(スイスのツェルマットは一五〇メートル)、南壁の真下になるから、標高差からも、頂上までの直線距離にしても、それだけマッターホルンに接近していて迫力十分な地点だといつてよい。

ブルーユという地名を私をはじめて知つたのは、エドワード・ウインパーの八回にわたるマッターホルン登攀の紀行をまとめた『The Ascent of the Matterhorn』からで、私はこの本の一八八〇年版を愛蔵していて、折にふれ手にとっていたからよく知っているのだが、アルプス黄金時代の終幕を飾るマッターホルン初登攀をめざしたスイス側からの登攀にカレルを誘つた。しかしイタリア側からのルートにこだわるカレルからはついに合意が得られず、ウインパーはテオデュール峠を登ってツェルマットへ転進する。

彼の八回目のマッターホルン初登攀をめざす計画であり、その舞台はやはりブルーユから幕をあけるのである。だからウインパーの本にはいたるところにブルーユが出てくる。ブルーユという地名を知らないで、チェルビニアなら知っているといるのは「シロウマ」は知らないが「ハクバ」なら知っているというようなもので、ウインパーの本など読んだことがない人なのであろう。歴史は大切にしたいものだ。

※

滞在中私は、言わば本村になるツェルナンシユ村に二度ばかり出かけた。八キロばかり下つたところで標高も一五〇メートルと低くなる。曲がりくねつた細い村道におさまりの教会堂があつて、その裏に面して小さな石だたみのたまり場があつた。

カレル、アメ・グレ、メイネ、ビツシユ、そのほかたくさん山男たちのレリーフ、顕彰文のプレートが所狭しと並んでいる。私は、こういうところに、外国人ではあるけれどもマッターホルンの探検にとつて格別縁が深く功績のあつたエドワード・ウインパーの事跡などを讀めるものがないのを不思議に思つたが、ついにそれらしいものを見つけたことはできなかった。

ブルーユではホテル・プラネットが私の定宿である。マダムに、昔ここにたつた一軒の旅人宿ホテル・モンセルバンがあつたということを知っているか、と聞いてみた。「知つている、しかし今はない」マダムは私を窓ぎわにつれていつて指さしながら「あの丘の上に黄色い建物が見える、あそこにモンセルバンがあつたさうだ」と教えてくれた。そういえばウインパーの本にも小高い丘の上にとあつたような気がする。あるいは彼をテーマにしたカール・ヘンゼルの小説であつたかもしれない。早速そこで登つて周辺を歩いてみたが、その昔活躍したアルピニストたちが入れ代わり立ち代わり泊まつていったホテル・モンセルバンがあつたところだという表示のようなものは何も見当たらず、いささか失望した。しかしその近くには青々とした牧草に群がる放牧の牛たちが百頭近くいたろうか、よだれをたらし、モウと声をあげる昔ながらの牧歌的風景が私を喜ばせた。

集落の一本道をぶらぶら歩くと、すぐ眼に入るのがガイド姿の石像である。これはたしか特定の人物の像ではなかったように思う。それよりもちよつと目立たないが、ガイド仲間の集会所のようなどころの入り口の壁に、一八六五年七月十七日、チ

エルビノにイタリアルートから初登攀した四人のイタリア人、すなわちアントワーヌ・カレル、J・ピッシユ、アメ・ゴレ、J・A・メイネら四人の名を彫った小さな板が取りつけられているのと、その少しわき、別の店の壁にこの四人の顔を彫ったレリーフが無造作にはりつけられているのに気がつく。

それから、裏を流れる川沿いにアオスタの名士ジョルダノがカレルたちを激励してチェルビノに登らせたことを記念するプレートがあるのを見つけた。三百回登頂したガイド、ジェアン・ペリシエの石版レリーフとか、イタリア隊によるK2一九五四年の記念プレートまであった。

以上のようなものが私の好奇心をとらえたのに伴い、どうしてウインパーについてこの山村はふれないのだろうか。

※

ウインパーの本を読んでみると、彼はイタリア人と組んで何回となく山頂を狙うが成功しない。やむを得ずスイス側からのルートに切り替えてカレルを誘うが、言を左右にして逃げられてしまう。ウインパーはそのことに非常な不信感を抱く。誇り高さ英国人のプライドが許さなかったのであろう。やがてシャモニーの山案内人ミッシェル・クローの協力

を得て、五年がかりの宿願をはたし、スイス側から頂上に立つ。さてそれからだ。以下はウインパーの書いた本、便宜上浦松佐美太郎の訳書『アルプス登攀記』によることにしたい。本書は浦松のほか石一郎、新島義昭部分的には大島亮吉も訳を発表している。

ウインパーは頂上に立つと、同じ日、あくまでイタリアルートにこだわるカレルともう一人が、頂上まであと三〇〇メートルあまりのところまで登ってきているのを発見、

「クロー！クロー！やってこい、あすこだ。見えないか。ああ、碌でなしめが、あんな下の方にいる。クロー、あいづらに分からせてやらなきゃならない。私は岩を持ち上げるとそれを放り投げた。私たちは登山杖を突っこんで岩をゆさぶり落とした。岩なだが、岩壁にこたましながら落ちていった」(傍点筆者)。

この傍点部分を大島亮吉は「奴等」と訳し、「あいづら」とあるところも「奴等」と訳し、石、新島はおだやかに「連中」と表現しているが、原文のコカン(Coquins)は浦松と同じく「碌でなし」とやっている。コカンは辞書によると、こじき、やぐざ、ならず者などである。「コカン」はフランス語だから、これはたぶんシャモニーのクローがそう叫ん

だのであろう。ウインパー自身が言った言葉としては、すくなくとも著書の上ではコカンとは言っていないし、「奴等」の原文もtheyでありthemであるところからすれば、ウインパー自身がイタリア人から反感を買うようなところはないのだが、いけないのは何と言っても岩を投げつけたことだ。

ドイツの作家カール・ヘンゼルは「これはまた仇敵に対する憎悪の原始的な歌である」(書上喜太郎訳)とも言っている。

ウインパーの本がロンドンで出たのは一八七一年、翌年早くもドイツで訳出され、フランスではさらにそ

の翌年翻訳出版されている。

ところが最も縁の深いイタリアでは、まるでこれを無視したように一九三二年になるまで出ていない。あままでひどく言われては、イタリア語に翻訳する気になどなれなかったのはあたりまえかもしれない。ウインパーに対するイタリア人の怨念のようなものを感じた。ツールナンシユ村にも、その出先のブルイユにもウインパーに関するものが見当たらないのは、もしかするとそういうところに根があるのではなからうかと私は思った。

しかし、面白いことに、イタリア山岳会は一八七六年ウインパーを名

●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円(税込)

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

●深田クラブ編●

深田久弥の研究

読み、歩き、書いた

飯島斉 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円(税込)

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社

東京都北区滝野川 7-6-13

電話・FAX 03(3915)8110

譽会員に推しているのです、私は少々思い過ごしをしているのかもしれない。

イタリアでの出版がおくれていることについて、書誌に詳しい会員水野勉氏が、それはウィンパーに対するイタリア人の感情よりも、一八〇〇年代の中期は、統一イタリア王国成立間もない時期なので、山岳文献などを翻訳出版できるような国情でなかったからではないかと、至極穏健な解釈を私に漏らしてくれたことも紹介しておきたい。

この夏ブルイユのはずれにある小さな店をひやかしていたら、並んでいた本のなかにCDA 1996 La Salita Del Cervino: E. Whymper が眼にとまったので買っておいた。イタリア語への訳者はAnna Balbiano Laramengo、どうやら女性らしい。イタリア語版の五冊目になるのだと思う。

私はその本をかかえながら、宿へ一本道をぶらぶらと登っていた。正面には南壁から南西稜にかけて新雪にキラキラ光るチェルビノが、見上げると首が痛くなるような高さにそびえている。リオン氷河の末端に、昨日行ってきたばかりのアブルッチ公の山小屋がかすかに見えている。そのすぐそばに、疲労と寒さのため倒れて再び帰らないアントワーヌ・

カレル六十一歳終焉の地点がある。晴れていれば九〇メートルの眼下に自分のねぐらを望めるであろうところである。

いまから百三十四年前、日本山岳会が創立される四十年前も昔に、繰り広げられた激しい初登攀争いの終幕の舞台を目の当たりにしているような感動をもつて、私はチェルビノII マッターホルンを飽かず眺めてきたのであった。

浦松佐美太郎訳『アルプス登攀記』岩波版の解説文(ウィンパーのこと)で浦松さんは「本書のフランス語訳は一八七三年、ドイツ語訳は一八九二年に出版」と述べているが、大島亮吉さんは遺稿集『先蹤者』で「本書の独逸語訳は一八七二年ステーゲルに依つて訳され出版」と書かれ、浦松説と二十年も違う。残念ながら日本山岳会にはドイツ語訳はなく確かめようがなかったところ、先述の水野会員は、ドイツの書店の古書目録には一八七二年版があると載っている、おそらく浦松さんの思い違いではないか、と言っていた。浦松さんのような完璧主義の人にも、そういう思い違いがあるものかと私は意外に思った。と共に、岩波版だけしか読まない人はそう思いこんでしまうおそれがあるので念のため蛇足を加えた。

さんけんだより

静けさも 大きな魅力

管理人

木村太郎・弥生

静けさも体験してほしい、と言いたくなるほど山研は静かです。

風が渡る音、遠くの猿の鳴き声、梓川の流れまでが、山研内にいながらにしてよく聞こえます。河童橋の近くにありながら、遊歩道から少し離れたところに建ち、ほかの宿泊施設とも離れているため、その静けさが守られているようです。

そして私たち自身驚いたのが、普段あまりにも静かなために耳ざとくなり、山研入り口の階段を上がって行く人の足音が、管理人室にいてもわかるようになったことです。足音以外にもFAX受信時の「カチツ」という音、冷蔵庫のファン、遠くで車のドアを開める音、人工的な物音に対してとても敏感になりました。

しかし人工的な物音のほとんどしない夜は、とても神秘的です。都会育ちの私たちには、音の少ない夜というのが最初は不思議で、

部屋の電気を消して目の前に手をかざしても、その手が見えないほどの真の闇の中にあると、視覚、聴覚がその働きをストップしてしまったのではないか、という気になったものです。テレビを消して、都会にはない静けさの中に身をゆだねるのも、山研でオススメしたい過ごし方のひとつです。

そんな静かなある夜、上高地でひとつの事件が起こりました。といっても山研で起きたことではなく、三キロほど離れた明神池近くです。夜遅く皆が寝入ったところ、突然「ガラガラ」と玄関の戸が開き、誰かが入ってきた様子。わずかながら「ギシギシ」音をさせて台所に移動し、何かしている。恐る恐る懐中電灯で照らしてみると、犯人は冷蔵庫を開けておいしそうにハムを頬張っている「アナグマ」でした。

この話を聞いて思わず笑ってしまったのですが、アナグマが本来山の中で探すべき餌を、人間の冷蔵庫から盗むなんて、何だか淋しくなるような事件でした。人が山の中で暮らすということの、そのことが彼ら動植物に与える影響の大きさを考えさせられる事件でした。

報告

REPORT
10月

集委員会

運営方法を変更

山行は立案、準備から参加

新委員が集委員会会の活動をはじめました。集委員会は「役員・委員はメンバーズサーバントたれ」との先輩諸兄より教えを受け、委員が「計画・宿・交通機関の手配・下見などの準備作業」つまり旅行業者のような仕事を行ってきましたが、次の理由で活動方法を変更します。

- ①本山岳会の会員構成も変化し行事参加者の力量に差が生じてきた。
- ②計画時に対象を絞りにくく比較的に楽な計画を提供せざるを得ない。(満足感を得られない方が増えてきたのではないかと危惧がある)
- ③現在のレベルをステップアップしたい方にもその場を提供できる。
- ④参加者各自の主体性がいくらかでも計画に反映できる。

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

⑤登ったという結果だけ得られる登山より、計画時や準備の楽しみも味わえる。

との考えで、年三回の主な行事(初夏、秋、スキー)の運営方法を変えることにしました。

これからは、参加希望者に計画の立案、準備から参加していただきます。これで、同一の山をいくつかのルートで登ることや、山小屋や旅館以外の天幕泊のプランや、縦走も可能になります。

地方在住の参加希望者が準備会に参加できない方には、準備会で決まったいくつかのプランをお知らせし選択していただきます。

当面、目的山域は委員会決定しますが、希望の山がある場合は事前に(半年前まで)ご連絡いただければ選考の際考慮します。

この秋に予定していた「きのこ山行」は種々の準備の遅れで中止しま

した。「きのこ山行」ファンの方々には誠に申し訳ありませんでした。来年一月のスキー懇親会についてのお知らせはインフォメーション欄をご覧ください。(勝山康雄)

図書委員会

古道を尋ねて・旧天城峠

第六回の「古道を尋ねて」は六月十三日、伊豆半島の天城山脈を横断する旧下田街道の旧天城峠を訪ねた。前日は天城山脈の最高峰である万三郎岳に登り、河津町で宿泊。十三日八時、梅雨とは思えないよい天気のもと、旧下田街道を旧天城峠に向けて出発した。

天城山脈は伊豆半島のほぼ真ん中を東西に延び、伊豆を南北に分断しているが、山脈を越えて南北を結ぶ古い道や峠がいくつか残っている。そのうちのひとつ、旧天城(二本杉)峠を越えている旧下田街道は、文政二(一八一九)年完成し、明治三十八(一九〇五)年に旧トンネルが開通するまでの八十六年間、アメリカの初代駐日総領事タウンゼント・ハリスや吉田松陰をはじめ幾多の歴史上の人物が往来し、文化交流や日本の歴史にも多大な影響をもたらした幹線道路であった。

河津川に沿って田植えが終わった

ばかりの石垣に囲まれた田圃や、たわわに実った夏みかんの段々畑の中の細い曲がりくねった道をしばらく進むと、突然国道四一四号線の巨大なループ高架橋が出現した。この辺から河津七滝(滝のことをタルと呼んでいる)が連続して現れ、上部の四つの滝を見物しながら脇を登った。滝が終わると明治十年に植えられた宗太郎杉が鬱蒼と並ぶ林道になる。道端に残る石垣や石塔、石仏はすっかり苔むしていた。

杉林を抜けると大きな樅の根本に石仏が二体あり、ちよつとした広場の宗太郎団地に出た。ここで河津川の本谷と別れて橋を渡り地獄谷に入るが、沢沿いの道はようやく人が一人歩けるくらいに細くなり、しかも荒れてきた。沢の水はばったりと消えたかと思うと、また水音がして大量の水が流れているという不思議な沢である。スイカズラの甘い芳香が汗ばんで疲れた体を癒してくれた。

道は次第に急坂になり、沢をつめ終わると一体の石仏がある尾根に飛び出した。ここから杉や檜の林の中を尾根を巻くように進むと、旧天城峠であった。直径一メートルはあるうかと思われる大きな杉が二本並んでいて、これが二本杉峠と呼ばれるゆえんであろう。

とにかく大変な道だった。その昔、

徒歩の人はもちろん、籠を担ぐ人も馬さえも苦勞したに違いない。谷文晁や滝沢馬琴などもたどったという道に、自分も足跡を残したかと思うと、感慨深いものがあつた。

(伊藤博夫)

フォトビデオクラブ

「山研」で写真展を開催

フォトビデオクラブの写真展は、五月下旬ギリシャ・アテネ市で、六月初旬には東京・上野松坂屋、続いて夏山シーズンのさなか七月一日より八月二十日まで五十日というロングランで上高地・山研地下一階の資料展示室で開催された。

今回は、山研運営委員会の企画で、地元、上高地区、上高地観光旅館組合、北アルプス山小屋交友会の後援により開かれたもので、上高地を訪れた一般観光客にも呼びかけてもらった。地階展示室の壁面いっぱいに表示された国内外の作品約五十点、期間中三百人近くの来場者もあり、山の自然のすばらしさを見ていただいた。

この写真展が山研にとって広報活動の一助ともなれば幸いである。来年もさらに優れた山岳写真を皆さんにご覧いただければと、クラブ員一同がんばっている。

なお、後援いただいた上高地関係の諸団体に紙面を借りて感謝申し上げます。

(羽田栄治)

(羽田栄治)

三水会現地集會

あんころ餅と薬湯の集い

三水会は九月四日、上高地山岳研究所で恒例の「あんころ餅と葉湯の集い」を三百九十六回の現地集会として催した。

やはり上高地である。このあたりは歩き尽くしてて新たなコースはない、と自負する向きも多いのだが、改めて上高地で集うとなると違ってくる。この日も、それぞれが明神岳・東稜・前穂高岳・岳沢・常念岳・蝶ヶ岳・徳本峠・槍ヶ岳・奥穂高岳・涸沢・新穂高・西穂高岳・田代橋などのルートに分かれて山行し、上高地に集結した。集中登山といったところだ。

この会の趣旨を、かつて紹介した二代目の山研が建った時、会員が偶然に行き合わせ、また偶然にザツクから缶詰のあんころを出したのが始まりである。毎年集まろうということになった。その後、辛党の要望で薬湯が加わった。こととして二十三回目になる。

会を重ねると、運営はなめらかである。午前十一時にJR松本駅に集

山旅イラスト通信 豊田時男



合、駅前のスーパーで食料を調達、また造り酒屋で薬湯を仕入れ、午後六時を定刻開始とし、準備し始める。あんころ餅のほか豆腐・きのこ飯が定番だ。

定刻を待ちきれずに始まった宴たけなわのなかで開会宣言というものも恒例になってしまった。夏山を総括しながらの談笑が続く。しかし、年々歳歳話題同じからずである。

山研運営委員会から山研利用を促す呼びかけがあった。管理していただいている木村夫妻の温かいもてなしもあって、ことしの利用者は多いようだ。宿泊者名簿の署名がだいぶ進んでいる。われわれの集いも参加二十六人。和室に入りきれず、展示

ラリグラス植林報告

「発芽からの育苗」をはじめました

今年（来年三月まで）日本山岳会のラリグラス植林プロジェクトは地球環境基金の助成を受けて行っていますが、いづれは独立して自力で継続しなければなりません。

植林が成功するには十年以上の根
 気のよい作業が必要ですが、一方百
 年後の姿を想うときには限りなく夢

が広がります。

「山」六四九号でこのプロジェクトを紹介したところ、多くの方より参加のご希望をいただきました。この原稿が会報に載るころには、さらに活動が進んでいると思いますが、随時参加可能ですので、関心をお持ちの方はぜひお申し出ください。(PAX・〇四五―八三三―八五〇五 大森弘一郎宛)

※
では現状をご報告します。

カトマンズの北約三〇キロメートルのシバプリに登る途中の山道の両脇、高度約二〇〇〇―二二〇〇メートルの地点、一度畑にして自然が壊されたところに、ここにもともとあったほかの木ととも石楠花は植えてあります。そして虫や猪の害と戦っています。

また、昨年作った配水管が、山道も壊れる大雨により破壊されてしまいました。配水管は復旧しましたが、昨秋のJACツアーで会員の方に植

えてもらった苗の一部が残念なことに破壊されました。それに代わるものとして、今年は二十カ所ほど密植を試みました。

シバプリの苗床にあたる屋久島で育てて持ってきた約四千本の苗は、いろいろな手入れをしながら順調に育っています。

さらに毎日幼い苗の面倒を見られるようにと、パタンの側のリングロードの脇に土地を借り、日本山岳会の苗床を作りました。ここでは今年から「発芽からの育苗」をはじめていきます。まだ完全に軌道には乗っていませんが、竹で作った育苗棟とバンガローができています。そして二千本ほど育っています。「日本山岳会ラリグラス育苗研究所」の札が出ていますから、どうぞお立ち寄りください。予定を聞かせていただければ現地に連絡します。ネパールの若者と一緒にバーベキューぐらいできる環境です。

ここから無限に苗の供給ができることが現在の夢です。シバプリの次はチソパニを考えています。これらの花が山々を彩り、カトマンズ空港に着くお客さんの首をラリグラスのレイが飾るようになるのはいつのことでしょうか。

多くの皆さまと楽しみを共有したいと思っています。(大森弘一郎)

平成十一年度海外登山基金助成登山計画募集

海外登山基金委員会

日本山岳会は、登山界の活性化をめざして優れた登山計画に対して海外登山基金による助成を行っております。記念すべき二〇〇〇年を前に、今年は困難を求めている挑戦、発想の新しい、夢大いなる計画などユニークな登山計画を支援したい、と思います。

単独、パーティーは問いません。左記の要領でふるって応募ください。会員以外の応募も歓迎します。

記

対象 平成十二年二月一日～平成十

三年一月末に海外の山へ出発する登山隊。

申し込み方法 所定の様式(本会事務局にご請求ください)に記入し、登山計画書(五通)を添えて申請してください。

申し込み締め切り 平成十一年十二月二十日

審査ならびに交付の時期 平成十二年一月中旬に当委員会で審査をし、二月の日本山岳会理事会で決定します。

交付金額 百万円

日本山岳写真の系譜展

「山を愛する写真家たち」開催

恵比寿の東京都写真美術館で、日本人写真家による山岳写真に焦点を当てた「山を愛する写真家たち」日本山岳写真の系譜展が九月七日より開催されている。明治時代から現代まで約百年の歴史を持つ山岳写真の系譜を、四十人の作家による作品約二百五十点と資料によって紹介するもの。さながら目で鑑賞する日本登山史という趣があり、見ごたえがある。日本山岳会も後援の一翼を担っている。会期は十一月四日(木)まで。(村井 葵)

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのままだ正しい磁気方位です。



重量78g.

つや消し黒 ￥17,000

送料 ￥600

質灰色メタリック ￥18,000

消費税別

カタログ代無料、電話、FAX、葉書でどうぞ

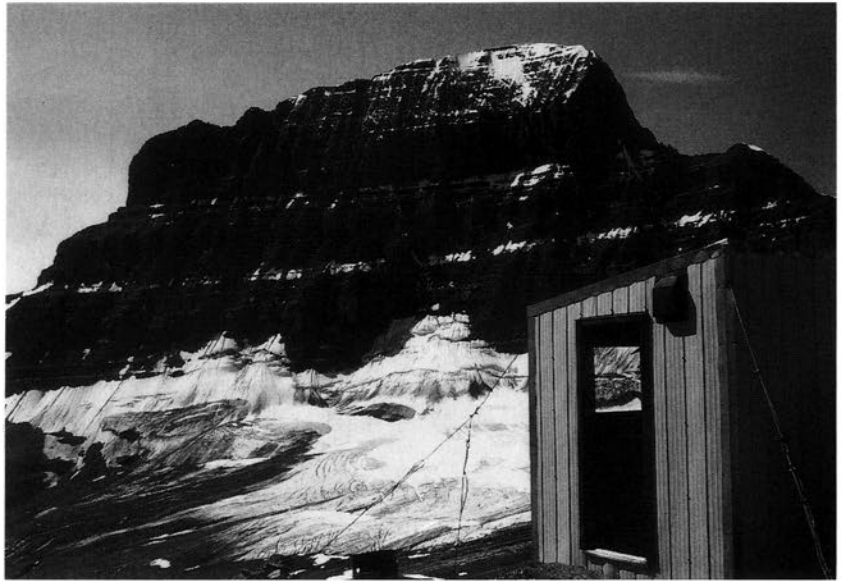
〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号

TEL 03-3926-5411 FAX 03-3926-5411

株式会社 石神井計器製作所

アルバータ峰初登頂75周年 記念イベント開催のご案内

アルバータプロジェクト2000実行委員会



アルバータハット（右の小屋）よりアルバータ峰を望む

会員の皆さまには既に一昨年の晩餐会や本会報などを通じてご存知の方も多いと思いますが、日本山岳会による日本人初の本格的な海外遠征登山であったカナディアンロッキーマ脈アルバータ峰（三六一九メートル）の初登頂七十五周年を記念する行事が、いよいよ来年八月にカナダ山岳会との合同で、カナディアンロ

ッキーマンにおいて行なわれることとなりました。この記念祝賀行事は、一九九五年にカナダ山岳会から最初の提案をいただいて以来、五年間にわたって両国登山界の友好関係の発展を目的に様々な行事を通じて、両山岳会の関係者が公私にわたる交流を深めながら、大事に育んできたものです。

一連の祝賀行事の一つとしてまず、日本山岳会、カナダ山岳会双方から三名ずつのクライマーが合同チームを編成し、初登ルートよりアルバータ峰に挑みます。この模様はビデオ映像に記録され、頂上にはレプリカのアイスアックスを残してくる予定です。

またジャスパールでは町を挙げての盛大な祝賀会が行われます。この場では、太平洋を挟んで長年二つに別れて保管されていた伝説の初登頂記念アイスアックスの石突き部分が、日本山岳会よりカナダ山岳会に寄託され、末永く一つの形となってジャスパールの博物館に安住の地を見出すこととなります。

そしてこのたび、この祝賀行事に併せて、両山岳会の会員同士が交流を深める機会として、カナダ山岳会が独自に所有する美しい山小屋に宿泊しながらのトレッキングを満喫したうえで、ジャスパールにおける祝賀会に日本山岳会を代表してご列席していただくプランを用意しました。現時点で決定している行事の概要は左記の通りです。参加を希望される方はふるってご応募ください。

記

主催
日本山岳会及びカナダ山岳会

目的

アルバータ峰初登頂七十五周年を合同で祝い、日本とカナダ両登山界の友好関係を促進すること。

日時

二〇〇〇年八月十一日に日本を出発、同月二十一日に帰国。

行事

一、アルバータ峰初登ルートのアタック

日本・カナダ合同登山。メンバー六名は両山岳会実行委員会よりすでに推薦済。

二、記念親睦トレッキング

●各トレッキングコースにはカナダ山岳会よりハイキングガイドほかスタッフが、クライミングコースにはクライミングガイドが同行する。

●小屋等での宿泊は基本的に全て自炊。寝袋等寝具持参。募集人員は山小屋の収容能力の関係で、トレッキングコースは各々最大十五名まで、クライミングコースは十二名まで。

●参加費用は為替レートにもよるが、概算でトレッキングコースが一名四十万円、クライミングコースが四十五万円程度を予定。

●各コースの内容は次のとおり。

- ①AOウイラーハットをベースとしたグレイシャー国立公園内のロジャースパス周辺トレッキング
- ②スタンリーミッチェルハットをベ

ースとしたヨーホー国立公園内のト
レッキング

③ウエイツギブソンハットをベース
としたジャスパール国立公園内トキン
ンバレーのトレッキング

④キャンプ場に宿泊してのアサバス
カ峰・ウイルコックス峰・ウーリー
峰等のクライミング

三、ジャスパールにおける祝賀セレモ
ニー

十八日と十九日は参加者全員が当地
の最高級リゾートホテルであるジャ
スパールクロッジ(当時の日本山
岳会登山隊がアルバータ登攀の基地
としたことから縁が深い)に宿泊
し、街を挙げての盛大な祝賀行事に
参加。この行事にはジャスパール
クロッジほか、ジャスパール国立公園
ジャスパールイエローヘッド博物館、
カナダ山岳ガイド協会、カナダ観光
局等様々な関係機関が協賛。

報告書 アルバータ峰の登山史を含
めて、この一連の行事の報告書を後
日作成する。

*記念行事全般に関する問い合わせ
熊崎和宏会員(TEL・〇九〇―二九一
〇―八八五四)へ。

*トレッキングに関する問い合わせ
アルパインツアーサービス(株)黒川恵
会員(TEL・〇三―三三三〇三―一九一
一)へ。

(事務局長・熊崎和宏)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

秋田支部

ふるさとの山、 羽保屋山と高森行

六月二十日、雪国にも「夏がきた」
と、秋田支部の一行二十二名は低山
ながらも味わいのあるふるさとの山
歩きを楽しみ、初夏の一日を満喫し
た。

羽保屋山 標高五九三メートルの山
頂に羽保屋大明神が奉られ、古くか
ら里人の信仰の山である。

山道(参道)は鳥居からはじまり、
大川目沢にかかる吊り橋を揺られな
がら渡る。足元ははじめ少しぬかる
むが、秋田名物?スパイクつき長靴
が威力を発揮する。天気は快晴でニ
セアカシアと雑木の間に鳥のさえず

りが聞こえ、すがすがしい朝を味わ
う。

一汗かいたところに風景は一変して
杉林となる。手入れのゆきとどいた
人工林が連立している。その中に小
さな祠(中御殿)があり、手を合わ
せる。林業の衰退により、こんなに
手入れのゆきとどいた林はほかにあ
まり見かけられない。

九十九折りの山道が続き、徐々に
高度を上げる。いつの間にか落葉松
越しに遠山が望まれ、汗ばんだ体
にそよ風が心地よい。

尾根はほぼまっすぐになり、サラ
サドウダンの花を見ながらお昼前に
山頂に着く。山頂からの展望は、さ
えぎるものがなく大パノラマ。記念
撮影をし、全員を祝して乾杯
する。

高森 標高五九二・五メートル、一
等三角点。

健脚組八名は秋田支部恒例の山の
はしごと相成った。四年前に支部山
行で東側より高森の頂を踏んだが、
今回は北側からの挑戦である。

大新沢に車を転がし、通行止めの
橋の右側に車をデポ。草の茂ってい
る林道を山館橋をめざして歩く。橋
の左岸より沢沿いに獣道程度の踏み
跡があり、溯上する。踏み跡はとこ
ろどころ切断されて、数カ所にトロ
ツコの軌道の残骸が見受けられ、往

年の林業の繁栄を垣間見た感がある。
沢の末端から作業道跡を登る。杉
の造林は手入れもされず、羽保屋山
の杉林とは比較に値しない。雲行き
が怪しくなり、遠くで雷の銅鑼が聞
こえる。途中から尾根に道が伸び、
ブナ林を通る。ブナは細いながらも
山に美を与え、心に安堵感を与える。
しばし休憩をし、日ごろの雑念を忘
れる。

道はだんだんと細くなり、やがて
藪に消える。藪を分け入り、分け入
り、一等三角点にたどり着く。再会
した三角点に乾杯。喜びの涙か、怒
りの涙か、天は雷と真珠大の雨を与
えた。

(柳田勇悦)

ノンストップ・チャーター便でカトマンズへ!

JAZ で飛ぶヒマラヤ

JAZ(ジャパン・エア・チャーター)は日本航空をバックボーンと
する国際線旅客チャーター便専門会社です。

[期間]①11/19(金)~11/27(土) ②12/27(月)~1/4(火)



運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員
アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444) 3033 名古屋 ☎052(581) 3211 福岡 ☎092(715) 1557

関空発着

羽田・福岡・札幌
から日本航空の
国内線[機]で
関空へ

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

なぜ、
仮題『(新) 日本山岳志』?
―百周年に真にふさわしい事業を―

田村義彦

会報「山」六五一号によると、創立百周年記念事業として「仮題『(新) 日本山岳志』の編集」をするとのこと、その理由はこの百年の間に「日本の山岳に関して膨大な情報を得ているので、これを集大成して、山岳人の便に供す意義は大きい」といわれる。

さらに「日本山岳志」が出版されて以来一世紀にわたってなおその価値を失っていないように今回の記念出版もまた今後百年間に耐えられるような内容としたい」と強弁されているが、本会創立者の一人である高頭式氏に対してこれ以上の無礼、

冒瀆はありません。

『日本山岳志』が「価値を失っていない」と言いながら、この百年の間に集まった膨大な情報を本にして「今後百年間に耐え得るような」「山岳人の便に供したい」というのはこの百年の間に『日本山岳志』が「情報誌」としての「価値」を失ったということに他なりません。『日本山岳志』を「情報誌」と見れば、百年を経て「情報価値」を失うのは至極当然のことです。世上、価値の論理、有効性、有用性の論理がまかり通っていますが、問題は、価値の問題ではなく、登山文化史上の意味の問題です。高頭式氏の偉業は本会会員には常識であり、私ごときものがいまさら云々する必要などさらさらありませんし、同著の登山文化史上の意義などいまさら論ずるまでもないことです。しかしそれを承知

でなぜ、いま、仮題『(新) 日本山岳志』なのでしょう。

情報(化)時代の今日「膨大な情報」を座して得ることは簡単なことで、高頭式氏の驚嘆すべき偉業と百年を経て比較すること自体ナンセンスであります。そして、その情報の性格からして、その「膨大な情報」など加速度的に価値を失っていくことなど、誰でもわかることです。

「今後百年間に耐え得る」など滑稽な思い上がりで子供たちに笑われるだけでしよう。『ガイドブック』とその類書が巷に氾濫している今日、糊と鉄とコンピュータで「仮題『(新) 日本山岳志』を編集」することなど、いとやさしいことで、それは、ガイドブック・ブームに屋上屋を架すだけのことです。それをも

って「創立百周年記念事業」と称するのは日本山岳会百年の歴史を冒瀆し、日本山岳会を私物視する稚拙な行為と言わざるを得ません。日本山岳会の歴史と伝統を敬愛し、会員であることに誇りを持つ名もなき一会員として、翻意をお願いしたい。

先般も『樹林の山旅』をめぐる「書名論議」があり、著者の反省、訂正もないまま聞かなくなりました。『日本山岳志』はあくまでも高頭式氏の史上唯一の書物であつて、たとえ「新」をつけ「嶽」を「岳」

に代えようとも、換骨奪胎は許されないと考えます。

真に創立百周年の記念事業に値する意義ある事業を心から希求申し上げます。妄言多謝。

カイラス巡礼と チヨモランマBCへの旅

森川葉子

五月二十一日から「カイラス巡礼と、チヨモランマベースキャンプ二十五日間」という旅に参加することができた。

隊員の最高齢は七十二歳のN響バイオリニスト尾原氏と、八海山の南雲氏、最年少は三十一歳の谷川太郎氏というバラエティに富んだ十一人と、隊長の貫田宗男氏であった。

カトマンズを出発して最初の高度順化のためハイキングを行ったニエラムの高地(四〇〇〇メートル)では高山植物が豊富で、地を這うようにして咲く石楠花、アネモネ、アツツ桜、スマレ、エーデルワイス、岩煙草の類を、踏みつけなければ歩けないほどであった。ニエラムタンラ(五〇五〇メートル)からチベット高原に入ると、そこは強風の吹きさらば岩と砂の世界で、紫外線をさへさるもののない空はあくまでも青い。



タルボチェよりカイラスに向かう巡礼 撮影 角地登志子

乾ききつた大地にあるかないかに生えている草を頼りにヤク、羊、馬などを遊牧で養っている人たちが、見渡すかぎりの岩原に砂粒のように見える。人も動物も大地にしがみつこうように生きているのがよくわかる。人一人いないと思つて、幕営の準備をしていると、いつの間にとこからか、チベット人の親子が現れて、じつと私たちのすることを穴のあくほど見つめている、という毎日であつた。

ヒマラヤの雪嶺を遠望する高原の、パリ・ダカルラリーもかくやと思われるがたがた道を、走行距離二五万キロというランドクルーザーで、砂を巻き上げて疾走する日々が続いた。

五月三十日、ジャカダワ祭の行わ

れるカイラス山麓のタルボチェに到着した。タルボチェの谷間は、祭りとカイラス巡礼のため集まった人々のテントがひしめき合っていた。前夜は皓々たる満月であつたのに、翌朝は一面の雪であつた。形容のしようのない青い色のマナサロワール湖畔より見たカイラス山は、一夜にして厳しくも美しい雪山のたたずまいに変わつていった。

六月三日より三日間、コルラ（巡礼）が始まつた。残念ながら膝に故障のある私は、初日だけ行をともしして戻るといふ留守番組だつた。初日、降りしきる雪の中、ヤクの到着を待つて遅い出発となつた。二時間ほど歩いたところで、後ろから追いついてきた馬子に勧められて馬に乗つた山下氏が、馬が突然暴れだして振り落とされ、馬の下敷きになるというアクシデントが起こつた。山下氏は、胸を押さえてあえぎながらも、留守番組の制止を振り切つて、どうしてもコルラをやり遂げると言つて、登つていつてしまった（帰国後、肋骨六本を骨折していたことが判明）。

雪の中を五体倒地するチベット人と混ざつてのコルラは、カイラス山を仰ぎ見ることができなかつたといえ、荘厳な美しい巡礼であつたことである。

留守番組とコルラ組がマナサロワール湖畔で合流したあとは、チヨモランマベースキャンプへひた走つた。ロンブク寺院での幕営はカイラスと異なり、暖かくみぞれ混じりの雨が降つて、チヨモランマは雲の中から白い頭をほんのちらりと見せてくれただけであつた。

北海道のエゾウスユキソウ

坂倉登喜子

北海道の高原や切り立った断崖、岩礫地、さらに浜風にゆれる海岸草原に、エゾウスユキソウが咲くことを「北の山の博物誌」(11)「海岸に育つアルプスの星」と題して、当時釧路市立博物館学芸員だった新庄久志さんが書かれた文献で知つてから久しい年月が経つていた。

北海道へは何回か訪れて、レブンウスユキソウは桃岩で、オオヒラウスユキソウは現在登山禁止になつている峠山へ沢ルートから登つて、断崖に咲く花の写真を撮影していた。だからその原種であるエゾウスユキソウをいつの日にか見たいものと思つていたが、このほど図らずも花の咲く場所を知ることができた。

鈴木敏子さんという方の押し絵展示会で、エゾウスユキソウが展示さ

れていると友人が知らせてくれたのがきっかけで、鈴木さんとの文通が始まつた。七月九日、鈴木さんが案内してくださり、釧路海岸からコンブの森近くの山稜で、咲き始めたばかりの若くかわいい久恋のエゾウスユキソウに出合うことができた。感激しながら北の国に咲く花を撮影した。長い間思いづけていた目的を果たすことができた。

また当日、植物研究家の新庄さんも同行してくださつた。私が大切に持つていった文献の著者が新庄さんだつたことを知り、二十年ぶりの出会いを喜んだ。エゾウスユキソウが取り持つ縁で、新庄、鈴木、坂倉の三人のえにしが結ばれ、大感激だつた。ウスユキソウが生んだ大きな出会いとして釧路新聞にも紹介されたのだつた。

夕方、山田和弘さんの林の中のランプが灯る山小屋に行き、北海道料理と、和楽演奏、歌や踊りの大歓迎を受けた。翌日は流しそうめんをこ馳走になり、皆さんの温かいおもてなしに感激しながら出発した。

次の日、藻琴山に登り、屈斜路を経て北のアルプ美術館に向かった。最後に寄つた屈斜路の自然塾で版画展が催されていた。将来エーデルワイス美術館が計画されたら、花の愛好者に喜ばれることだろう。

図書受入報告 (1999年8月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
栃の葉書房 (編)	花の名山100	238pp/22cm	栃の葉書房	1997	出版社寄贈
栃の葉書房 (編)	色別800種山草図鑑: 花色別に分類 特徴・分布・花期・栽培法	856pp/19cm	栃の葉書房	1999	出版社寄贈
岩手植物の会 (編)	岩手山の植物 [改訂版]	319pp/19cm	熊谷印刷出版部	1995	出版社寄贈
高橋秀洋	花の山八幡平の花: 自然観察フィールドガイド	135pp/19cm	熊谷印刷出版部	1998	出版社寄贈
梅沢俊	北海道山の花図鑑: 札幌市/藻岩・円山・八剣山	217pp/19cm	北海道新聞社	1994	出版社寄贈
梅沢俊	北海道山の花図鑑: 大雪山 [2刷]	249pp/19cm	北海道新聞社	1999	出版社寄贈
梅沢俊	北海道山の花図鑑: 夕張山地	206pp/19cm	北海道新聞社	1993	出版社寄贈
梅沢俊	北海道山の花図鑑: アボイ岳・様似山道・ビンネシリ [2刷]	237pp/19cm	北海道新聞社	1995	出版社寄贈
梅沢俊	北海道山の花図鑑: 利尻島・札文島 [2刷]	253pp/19cm	北海道新聞社	1999	出版社寄贈
京都新聞社 (編)	京都滋賀日帰りハイク [1刷]	222pp/19cm	京都新聞社	1993	出版社寄贈
丸山晴弘	山旅湯旅ふたび: 信州の秘めたる名山・名湯めぐり	222pp/19cm	ケイシイシイ	1997	出版社寄贈
丸山晴弘 (監修)	信州百名山ガイドブック: 信州百名山ガイドを作る会取材	220pp/21cm	ケイシイシイ	1999	出版社寄贈
高橋祐司	みちのく名峰紀行	185pp/19cm	無明舎出版	1993	出版社寄贈
西澤信雄	朝日連峰・鳥獣戯談	231pp/19cm	無明舎出版	1998	出版社寄贈
三浦隆夫 (編)	東山三十六峰を歩く: 面白の花の都や [2刷]	237pp/22cm	京都新聞社	1995	出版社寄贈
岐阜県山岳連盟 (編)	ぎふ百山 [復刻版・2刷]	273pp/25cm	岐阜新聞社	1997	出版社寄贈
岐阜県山岳連盟 (編)	続・ぎふ百山 [2刷]	295pp/25cm	岐阜新聞社出版局	1998	出版社寄贈
笠井潔	スキー的思考	301pp/20cm	光文社	1998	出版社寄贈
樋口正博	西堀榮三郎ものがたり	31pp/25cm	滋賀県湖東町		探検の殿堂寄贈
西堀記念探検の殿堂 (編)	日本の探検家たち: 未知への挑戦	110pp/24cm	滋賀県湖東町		探検の殿堂寄贈
中国新聞社 (編)	大山探訪: 自然へ愛をこめて (保存版ガイドブック)	155pp/21cm	中国新聞社	1991	出版社寄贈
中国新聞社 (編)	西中国山地: プナ林の四季 (写真集)	99pp/26cm	中国新聞社	1992	出版社寄贈
白石直典	英彦山と山麓物語	221pp/19cm	西日本新聞社	1997	出版社寄贈
福岡自然に親しむ会 (編)	宝満山徹底ガイド: ふくおか自然観察シリーズ	196pp/19cm	西日本新聞社	1998	出版社寄贈
高知新聞社編集局 (編)	四国百山 [1刷]	243pp/26cm	高知新聞社	1997	出版社寄贈
山崎清憲	高知の登山&ハイキング	159pp/21cm	高知新聞社	1994	出版社寄贈
熊本日日新聞社 (編)	熊本百名山: 高山から里山まで	227pp/21cm	熊本日日新聞社	1998	出版社寄贈
中島篤巳	周防100山百景	202pp/19cm	マツノ書店	1992	出版社寄贈
安倍正道	防長百山 [3訂3版]	237pp/22cm	マツノ書店	1992	出版社寄贈
長野県 (編)	山岳地域におけるし尿等の適正処理に関する調査研究報告書 (2次)	83pp/30cm	長野県	1999	発行者寄贈
山形大学コーボルト会	コーボルト: メントークI峰初登頂特集1998年	52pp/30cm	山形大学コーボルト会	1999	発行者寄贈
久保正人	四方山話: 山口の山百話・山の思い出	312pp/19cm	久保正人 (私家版)	1998	著者寄贈
久保正人	山旅の記録: 関東周辺の山々を巡って	236pp/26cm	久保正人 (私家版)	1996	著者寄贈
竹谷勲負	富士山の精神史: なぜ富士山を三峰に描くのか	208pp/22cm	青山社	1998	出版社寄贈
日立中研アルパインクラブ (編)	追悼: 日立中研戸田さんを偲ぶ会 (1996年6月)	66pp/30cm	日立中研アルパインクラブ	1999	発行者寄贈
横山厚夫	山麓亭百話 (上巻)	189pp/19cm	白山書房	1999	出版社寄贈
豊野則夫 (編)	上信越の谷105ルート: 全路査! ルート図収録/完全保存版	252pp/22cm	山と溪谷社	1999	出版社寄贈
中村圭志	兵庫県の山 (分県登山ガイドNo27)	111pp/21cm	山と溪谷社	1999	出版社寄贈
本の出版社 (編)	登山・ハイキング・バス時刻表 [関東版] 1999夏秋号	515pp/18cm	書苑新社	1999	出版社寄贈
高野亮	クライマー: 登山界の龍児・吉尾弘と若き獅子たちの闘い	262pp/20cm	随想舎	1999	出版社寄贈
深田久弥	百名山以外の名山50	301pp/22cm	河出書房新社	1999	出版社寄贈
Rom International (編)	日本地図の楽しい読み方・3 (KAWADE夢文庫 NoK-384)	221pp/15cm	河出書房新社	1999	出版社寄贈
戸野昭・朝倉宏 (編)	山で唄う歌I	126pp/16cm	茗溪堂	1999	出版社寄贈
佐々木民秀 他 (編)	日台友好・秀姑巒山親善登山報告書	60pp/26cm	JAC秋田支部	1999	発行者寄贈
中国科学院 (編)	天山托木尔峰地区的氷河与気象 (中国語版)	224pp/26cm	新疆人民出版社	1985	個人寄贈
Paul Hunt	Hiking in Japan [New Updated Edition]	205pp/19cm	Kodansha International	1999	D.センジャク氏寄贈

藤本 三樹雄 (四八八六)	隈部 恵子 (四七六五)	高石 清和 (四七三八)	終身会員	千田 武久 (二〇七八〇)	退会	北 博正 (四五六七)	目黒 元 (八〇七七)	吉田 功 (三八八二)	物故	■会員異動
						99・7・21	99・7・22	99・7・22		

30日	27日	26日	24日	23日	12日	10日	9日	7日	5日	3日	8月
アルパインスキークラブ	緑爽会	学生会	学生会	学生会	学生会	学生会	学生会	学生会	学生会	学生会	学生会
8月来客者324名	98同期会	秩父宮記念賞事務局	集会委員会	集会委員会	集会委員会	集会委員会	集会委員会	集会委員会	集会委員会	集会委員会	集会委員会

ルーム日誌

INFORMATION



イラスト・村上直温

◆岩登り研修会を開催します

指導委員会

中級程度の岩登り経験者を対象とし、アルパインクライミングにおける適切な岩登り技術習得を目的とします。また室内壁でのスポーツクライミングの実践も行います。

日時 十一月五日(金)～七日(日)

場所 文部省登山研修所(富山県中新川郡立山町千寿ヶ原)

費用 二万五千円(含宿泊、食事)

締切 十月三十一日

申込 会員番号、岩登り経験を明記の上、FAXで日本山岳会事務局気付・熊崎和宏(FAX・〇三

一三六―一四四四)まで。

*申込者には詳細を送付します。

◆平成十一年度年次晩餐会

総務委員会

本年度の年次晩餐会を次の要領で開催します。ご出席をお待ちします。

日時 十二月四日(土) 十六時開場

十八時開宴(予定)

会場 新高輪プリンスホテル
会費 一万五千円

*十二月五日には支部より出席の会員を対象とした懇親登山を予定。

*詳細は十一月月上旬までに会員各位に郵送します。

◆第三十一回山岳図書を語る夕べ

図書委員会

日時 十一月二十六日(金) 十八時三十分～二十時三十分

場所 日本山岳会集會室

講師 神長幹雄(前「山と溪谷」編集長)

演題 山岳雑誌編集を通じて山を語る

◆フォーラム「登山用具の新知識、選び方と使い方」

科学委員会

中高年者に目立つ転落事故や気象遭難のような初歩的ミスによる遭難を減らすためにフォーラムを企画。

日時 十一月二十七日(土) 十三時～十七時

場所 明治大学大学院講堂(JR御茶ノ水駅下車五分)

対象者 中高年登山者

参加費 五百円(資料代を含む)

内容

一、問題提起「中高年登山者の現状」

講師 大蔵喜福科学委員会委員

二、「登山用具の新知識」

講師 越谷英雄・ICI石井スポーツ第二営業部長

①ウェアの基本的な考え方と最先端の素材、肌着・中間着・外着(特に天候との関連を考慮した春・秋の服装について)

②登山靴の選択とメンテナンス(転・滑落遭難にどう影響があるか、歩き方)

③その他(ザックの新機構を知り楽に背負う、ストックの効用と注意)

*参加申込不要

問合せ 北野忠彦(〇九〇―三〇四六―一八八九 携帯)

◆志賀高原でスキー懇親会

集會委員会

今回は志賀高原で開催します。テント泊、ツアーも可能。詳細は準備会で決定します。地方在住の参加希望者には、準備会後の資料をお送りし、プランを決めていただきます。

日時 平成十二年一月八日(土)～十日(月)

費用 二万五千円程度(プランにより増減あり)

現地集合・解散

宿泊 横手・山本荘を予定

申込 十一月十五日までに会員番号、住所、氏名、年齢を明記の上、ハガキかFAXで、勝山康雄宛(〒三三四―〇〇五七 川口市安行原二二六―二三三三 FAX 〇四八―一九四―九六四六)

*第一回準備会 十一月二十四日(水)

十九時よりルームで開催します。

◆高橋てる子山の絵小品展

期日 十月四日(月)～三十日(土)

十一時～十九時三十分(日曜祭日は休み)

祭日は休み

会場 山の店デナリ B1(新宿区四谷二二〇 TEL・〇三―三三三―五三六―一九五)

◆黒石恒旅の回顧第二回展

会期 十一月二十九日～十二月四日

十一時～十八時三十分(最終日は十七時まで)

会場 アート・プラザ(東京都中央区日本橋一―一八 日昌ビル一、二階)

【訂正】九月号(六五二)五ページ「早池峰山行」は岩手支部の行事ではなく96同期会の「岳友の山を旅する」の山行でした。筆者は及川迪靖会員です。お詫びして訂正します。

■会員名簿の訂正

電話番号は〇二九八―七一一―〇二六三です。

中垣淑子会員の

電話番号は〇二九八―七一一―〇二六三です。

日本山岳会会報 山 653号

1999年(平成11年)10月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03) 3261-4433

FAX 東京 (03) 3261-4441

発行者 大塚博美

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社